

## 運 鈍 根

神戸大学卒の山中氏がノーベル賞を受賞した。丁度10年前、東北大学卒業の田中氏が同賞を受賞したことを、よく覚えている。このお二人は所謂、超秀才というのではなく、根気よく研究を積み重ね、失敗の連続にも絶望することなく、遂に運命の女神が微笑んだ人達であるようだ。例えば東大に一番で入るような超秀才というのは、brilliant すぎて、いつ叶えられるかしのれない当てのない努力を積み重ねられるほど鈍くはない。

超秀才とは、論理的整合性を持った完成された難解な理論をいち早く理解し、短期的に記憶する能力に優れている人であるといえる。この世の中の知識には難易度にランクがあり、義務教育である中学の勉強と比べると高校の勉強は遥かに難易度が高い。その高校の科目を全てマスターできる人は相当に高い知能指数を持っている人だと考えられる。彼は「何何試験」と名がつく分野で優越的地位を占める。それはそれで大変な能力だということを認めるに吝かではないのだが、社会的には「ただそれだけだ」と言うのが私の今の考えである。しかし、世の多くの人々は超秀才はどんな問題に対しても正しい答えを見出さうという「大いなる錯覚」を持っているようなのだ。言うまでもないことなのだが、①彼が答えられるのは高校の教科書で習ったことだけである。②又彼が答えられるのは答えのある問題だけである。③政治的な問題には答えられない。何故ならそれには価値観が介入し利害が絡む為、正解がないからである④将来の予測を必要とする事柄に対しても普通人と同じく何もわからない。このように言われれば当たり前のことなのだが、日本の官僚は自分達の権力と利権を維持する為、こうした人々の「大いなる錯覚」を利用し伝説にまで仕上げてきた。曰く、官僚は「無謬」であると。日本の官僚がいかに間違い続けてきたか、枚挙に遑がないのだが、未だに「頭のいい人たちが決めたことだから」などという発言をするひとが結構いるのが恐ろしいところだ。

秀才というのは数学ができるのでその美しさに魅了された人が多い。従って理論の精緻さ、理論体系の完成度の高さにより、その理論の優劣を決定しがちである。

今回のサブプライムローンに端を発して、世界中を恐慌に陥れたもともとの理論的支柱であった新自由主義を哲学的基盤とする近代経済学やモダンポートフォリオ理論は難解な数学を多用しエレガントで学問としての完成度は高く見える。そしてそれが今や仮説を越えて「教科書」となったために、秀才は信者になってしまった。

しかし、これら理論には様々な誤った条件が仮定されているのだ。人々は合理的行動するなどという合理的期待仮説などはその典型だ。そして、少し鈍い人例えば田中氏や山中氏ならば、そもそもそこで立ち止まり、「待てよ」と蹲ってしまう筈なのだ。

現代に「先進国」はない。誰も全く経験したこともなく、複雑な要因の絡みつく難問山積の時代なのだ。このような時代には「そもそも」と立ち止まる「鈍い」人々こそが求められている。

千葉の県人 鎌田 留吉